

〔直訳〕

- 1 その日のうちに 出て行って イエスは 家から 座っていた 海のわきに。
- 2 そして 集まった 彼のもとへ 群衆は 多くの、  
その結果 彼は 舟の中へ 乗り込んで 座ることに(なる)。  
そして すべての 群衆は 岸の上に 立っていた。
- 3 そして 彼は語った 彼らに 多くのことを たとえ話で 言いつつ、  
「見よ 出て行った 蒔いている者が 蒔くために。」
- 4 そして 彼が蒔くうちに  
あるものは 確かに 落ちた 道のわきに、  
そして 来て 鳥たちが 食べ尽くした それらを。
- 5 だが他のものは 落ちた 石地の上に  
そこでは それらは持っていなかった 土を 多くの、  
そして すぐに それらは芽を出した 持たないことのゆえに 土の深さを。
- 6 だが太陽が 昇って それらは焼かれた  
そして 根を持たないことのゆえに それらは枯れた。
- 7 だが他のものは 落ちた 茨の上に、  
そして 伸びた 茨が として 窒息させた それらを。
- 8 だが他のものは 落ちた 良い地の上に として それらは与えていた 実を、  
あるものは 確かに 百、 だがあるものは 六〇、 だがあるものは 三〇。
- 9 耳を持つ者は 聞きなさい」。
- 18 「そこであなたがたは 聞きなさい たとえ話を 蒔く者の。  
19 誰でも 聞いて 言葉を 御国の として 理解しなければ、  
来る 悪い者が として 奪い去る 蒔かれているものを 心のうちに 彼の、  
これは ある 道のわきに 蒔かれた者で、
- 20 だが石地の上に 蒔かれた者は、  
これは ある 言葉を 聞く者で として すぐに 喜びをもって 受け取る者 それを、  
21 だが 彼は持たない 根を 彼自身のうちに むしろ 一時的で 彼はある、  
だが起こって 苦難が あるいは 迫害が 言葉のゆえに  
すぐに 彼はつまずく。
- 22 だが茨の中へ 蒔かれた者は、  
これは ある 言葉を 聞く者で、  
そして 心配が 世の として 誘惑が 富の 群がって窒息させる 言葉を  
そして 実らなく 彼はなる。
- 23 だが良い地の上に 蒔かれた者は、  
これは ある 言葉を 聞く者で として 理解する者、  
その者は 当然 実を結ぶ として 造る  
あるものは 確かに 百、 だがあるものは 六〇、 だがあるものは 三〇」。

「新共同訳」

1 その日、イエスは家を出て、湖のほとりに座っておられた。 2 すると、大勢の群衆がそばに集まって来たので、イエスは舟に乗って腰を下ろされた。群衆は皆岸边に立っていた。 3 イエスはたとえを用いて彼らに多くのことを語られた。「種を蒔く人が種蒔きに出て行った。 4 蒔いている間に、ある種は道端に落ち、鳥が来て食べてしまった。 5 ほかの種は、石だらけで土の少ない所に落ち、そこは土が浅いのですぐ芽を出した。 6 しかし、日が昇ると焼けて、根がないために枯れてしまった。 7 ほかの種は茨の間に落ち、茨が伸びてそれをふさいでしまった。 8 ところが、ほかの種は、良い土地に落ち、実を結んで、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍にもなった。 9 耳のある者は聞きなさい。」

18 「だから、種を蒔く人のたとえを聞きなさい。 19 だれでも御国の言葉を聞いて悟らなければ、悪い者が来て、心の中に蒔かれたものを奪い取る。道端に蒔かれたものとは、こういう人である。 20 石だらけの所に蒔かれたものとは、御言葉を聞いて、すぐ喜んで受け入れるが、 21 自分には根がないので、しばらくは続いても、御言葉のために艱難や迫害が起こると、すぐにつまづいてしまう人である。 22 茨の中に蒔かれたものとは、御言葉を聞くが、世の思い煩いや富の誘惑が御言葉を覆いふさいで、実らない人である。 23 良い土地に蒔かれたものとは、御言葉を聞いて悟る人であり、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍の実を結ぶのである。」

①種を蒔く人のたとえ（1―9節）

①a 「イエスは出て行って」（1節）

1―2節はたとえが語られた状況を述べている。「その日のうちに、イエスは家から出て行って」とマタイは始める。並行箇所マルコ4章1節にはこの描写はない。マタイ12章46節には「その母と兄弟たちが、…外に立っていた」とあるので、その場面とのつながりをよくするために「イエスは…出て行き」と述べたのかもしれない。「家」はゲネザレト湖畔の町カファルナウムにあった家であろう（マコ121、29参照）。他方、3節には「見よ、蒔いている者が蒔くために出て行った」とある。3節との対応を意識すれば、「出て行く」イエスこそが、種を蒔く者と理解されていると見ることもできる。

①b 「イエスは舟の中へ乗り込んで座る」（2節）

マルコの並行箇所では、イエスがたとえを語り終えると、「イエスを舟に乗せたまま漕ぎ出し」（マコ436）、突風に出会う物語へと移行する。しかし、マタイではイエスはこの後、ナザレに戻る。しかも「舟から下りて」という表現もない。マルコでは「舟」は物語の構成上、必要であるが、マタイでは不要である。しかし、それでもマルコと同様に、イエスはたとえを「舟から」語ったとしているのは、「舟に座るイエス」と「岸の上に立つ群衆」とを対比することによって、イエスの教えを理解しない群衆との隔たりを描こうとしたのかもしれない。「座る」は「海のわきに座っていた」（1節）にも用いられているが、これは律法学者やラビが生徒に教えるときの姿勢である。イエスも教える時に「座る」という姿勢をとる（マタ51、二四3）。

①c 「イエスは多くのことをたとえ話で語った」（3節）

「たとえ」と訳されるギリシア語のパラボレーはヘブライ語のマーシャルに遡る。この語は「比喻・格言・謎・寓喩」などの広い意味を持っている。列王記上5章9節以下に「…彼の語った格言は三千、歌は千五百首に達した」とあるが、ここに「格言」と訳された語はマーシャル

(ギリシヤ語ではバラボレー)である。イエスが「たとえ話で語った」とされるのは、このソロモンの故事にならったのかもしれない。マタイ12章42節では、イエスはソロモンに優るものとされている。イエスが舟から語った言葉は、理解できる者には天の国の奥義を明かす「たとえ」となるが、理解できない者には「謎(たとえ)」で終わってしまう。

④「蒔いている者が蒔くために出て行った」(3節)

「蒔く」という動詞が3―4節に3回用いられている。「蒔いている者」は現在分詞。ここでは動作の継続や反復を表す。「蒔く」は、空の鳥は「種を蒔かず」、刈り入れもせず、倉に収めもしない(マタ六26並行)、と用いられている。共観福音書では、イエスのたとえ話での用例が多い。「からし種」のたとえでは、土に「蒔く」とときにはどんな種よりも小さいが、「蒔く」と成長して大木になる「からし種」に、神の国がたとえられる(四31・32並行)。「毒麦」のたとえでは、良い麦種を畑に蒔く人と、人々が眠っている間に毒麦を蒔く「敵」が登場する(マタ二三24)。イエスはたとえを説明して、「良い種を蒔く者」は人の子、「毒麦を蒔いた」敵は悪魔だと言う(一三37・39)。

⑤「あるものは道のわきに落ちた」(4―7節)

パレスチナではまず種を蒔き、その後で耕するのが普通であった。「道」は刈り入れ後の農閑期に村人が行き来するうちにできた通路であるが、それもやがては耕されて農地に変わる。それを承知しているので、農夫は「道」にも種を蒔く。また農閑期に茨が生えてしまっても、すぐに耕されるので、気にすることなく種を蒔く。イエスのたとえはパレスチナの日常生活を素材とするたとえであるが、このたとえも例外ではない。

⑥「それらは焼かれた：窒息させた」(6―7節)

「焼く」(カウマティゾー)は、「太陽などの灼熱」を意味するカウマからの派生語。新共同訳が7節で「ふさいだ」と訳した語プニーゴーは「窒息させる・絞め殺す」の意味。

⑦「あるものは百、だがあるものは六〇、だがあるものは三〇」(8節)

収穫量の描写は、マルコ4章8節では「あるものは三〇倍、…六〇倍、…百倍」というように、徐々に増える数字を用いている。マタイが順序を逆にして「百」から始めたのは、イエスの直弟子による宣教を高く評価し、これを理想化しているためかもしれない。いずれにしても、マタイにとってこのたとえは二通りの意味を持っていた。一つは、教会内にはさまざまな信者がおり、その全員が豊かな実を結ぶのではなく、蒔かれた種(御言葉)を台無しにしてしまう者もいるという現実認識とその反省である。もう一つは、農夫が途中で諦めることなく種を蒔き続けるように、宣教師も挫折せずに、天の国を告げ知らせることに励まねばならないということである。

⑧4―7節の傍点を付けた語(食べ尽くした・それらは焼かれた・窒息させた)は過去における非継続的な出来事を描写する時制(アオリスト)で書かれている。それに対して、8節の「それらは与えていた」は、過去の行為の反復や継続を表す時制(未完了過去)である。そこで「与えて続いていた」という意味になる。

⑨4―7節には、「道のわき」「石地の上」「茨の上」に落ちた三種類の「種」のことが述べられている。それらの種に共通するのは、いずれも実を結ばなかったということである。これらの実を結ばなかった種が、8節の「実を与え続けていた種」と比較されている。

⑩たとえの解釈(18―23節)

⑩18―23節は「たとえ」の寓喩的な解釈であり、イエスではなく、原始教会による解釈だろうと考えられている。寓喩的解釈とは、たとえに登場するいくつもの要素が――たとえば「道端に落

ちた種」とか、「鳥」とかが——それぞれ何にあたるかを解き明かすような仕方の解釈のことである。しかし、イエスが語ったたとえの特徴は、たとえ全体がある一点に鋭く集中するということにあると言われる。

⑥ 18―23節がイエスによる解釈ではないとされる、もう一つの理由は、3―9節のたとえでは、さまざまな種の運命に焦点が当てられているのに対して、18―23節では、種（御言葉）そのものではなく、種（御言葉）を蒔かれた人間の側の運命に焦点が移されていることである。「たとえ」も「解釈」もイエスによって語られていたとすれば、このようなズレが起こることは考えられない。そこで、18―23節の寓喩的な解釈は、イエスの「たとえ」を教会生活上の戒めとするために、原始教会が行った再解釈の結果だと説明される。

㉓ 「蒔く者」

18節で「蒔く者」と直訳した言葉は分詞形であるが、この分詞形は3節の「蒔いている者」とは異なり、継続や反復を表す形ではない。非継続の分詞形を使ったのは、種が死ぬことなく、理解という実りに至ったことを暗示するためかもしれない。いずれにしても、初代教会の人々の理解が、18―23節で語られている。イエスの言葉を聞いても、聞く姿勢が良くなければ、実を結ぶことができないことが述べられる。

㉔ 「蒔かれた者」(19節)

19節2行目の「蒔かれているもの」は4・5・7・8節の「あるもの・他のもの」と同様に中性形で、「種」を指している。しかし、19節3行目の「蒔かれた者」は男性形で、種を蒔かれた人を表している。20・22・23節の「蒔かれた者」も同様である。18―23節は、「種」ではなく「種を蒔かれた者（言葉を聞く者）」の結末を述べている。

㉕ 「悪い者が来る」(19節)

マルコ4章15節は「サタン」というセム語的表現を使うが、マタイは「悪い者」に変えている。悪い者が来て、「蒔かれているもの」を奪い去る。「蒔かれているもの」は完了分詞。すでに蒔かれていた種が今もそこにあったことを表している。

㉖ 「一時的で」(21節)

この語（プロスカイロス）は「一時的の・しばらくの」の意味だが、人の気質に使われると「長続きしない・三日坊主の・移り気な」の意味になる。

㉗ 「富の誘惑」(22節)

「誘惑」(アパター)は「欺瞞・ごまかし」の意味であるが、ヘレニズム期のギリシア語では「罪へと誘い込む」魅惑・快楽」の意味で使われる。

㉘ 「群がって窒息させる」(22節)

この語（シユンプニーゴー）は、7節で「窒息させる」と訳されたプニーゴーにシユン（完全に）という前綴りを付けた合成動詞。茨が麦を窒息させるように、世の煩いや誘惑が霊的な生活を完全に窒息させてしまう。

㉙ 「実らなく」(22節)

この語（アカルポス）はカルポス（実り・果実）に否定辞アが付けられた、「実のならない・成果のない・役に立たない」の意味の形容詞（箴一30、一二14、一三12などを参照）。

① イエスは種蒔きのたとえを使って、諦めずに豊かな収穫を信じて宣教するようにと、弟子を励ました。イエスのたとえを伝承した教会は、たゆまずに宣教するイエスの姿から、自分たちの姿を省みて、たとえを解釈した。それによって、御言葉を宣教する者のたとえは、御言葉を聞いた者のあるべき姿を教えるたとえとして読まれることになった。

③「良い地の上に蒔かれた者」とは

〔新共同訳〕マタイ13章10―17節

弟子たちはイエスに近寄って、「なぜ、あの人たちにはたとえを用いてお話しになるのですか」と言った。11 イエスはお答えになつた。「あなたがたには天の国の秘密を悟ることが許されているが、あの人たちには許されていないからである。12 持っている人は更に与えられて豊かになるが、持っていない人は持っているものまでも取り上げられる。13 だから、彼らにはたとえを用いて話すのだ。見ても見ず、聞いても聞かず、理解できないからである。14 イザヤの預言は、彼らによって実現した。

『あなたがたは聞くには聞くが、決して理解せず、見るには見るが、決して認めない。』

15 この民の心は鈍り、

耳は遠くなり、

目は閉じてしまった。

こうして、彼らは目で見ることなく、

耳で聞くことなく、

心で理解せず、悔い改めない。

わたしは彼らをいやさない。』

16 しかし、あなたがたの目は見えているから幸いだ。あなたがたの耳は聞いているから幸いだ。17 はっきり言うておく。多くの預言者や正しい人たちは、あなたがたが見ているものを見たかったが、見ることができず、あなたがたが聞いているものを聞きたかったが、聞けなかつたのである。」

①a「あなたがたに天の国の奥義を知ることが与えられている、だがあの人たちにそれは与えられていない」(11節)

⑦並行箇所のマルコ4章11節「あなたがたには神の国の秘密が打ち明けられている」を直訳すると、「あなたがたに神の国の奥義は与えられている」となる。マタイはマルコにはない「知ること」を加えている。マタイでは、弟子は天の国の奥義を知っている。11節では「知ることを与えられている弟子」と「与えられていないあの人々」が対比されている。「与えられている」は神が行為者であることを婉曲的に示す神的受動態であり、神が弟子たちに天の奥義を知ることができるように働きかけている。さらに12節は、天の国の奥義を「持つ者は、与えられ、溢れさせられる」が、「持たない者は、取り上げられる」と述べて、この対比を強調している。16―17節は、たとえを聞いて理解する弟子への祝福を述べている。

①「あの人たち」とあるが、マルコの並行記事(四11)では「外の人たち」である。マタイは「外の」を削除することによって、内側の人々である「弟子」と外の人々である「弟子でない人」との対比から、「本物の弟子」と「偽りの弟子」との対比に変えている(一二46―50)。また、マルコの「外の人たちには、すべてがたとえで示される」をマタイは「あの人たちにそれは与えられていない」に変更した。この結果、マルコでの対比は「神の国の秘密が明かされる」内側の弟子と「すべてがたとえで示される」外側の人々との間の対比であったが、マタイはそれを「天の国の奥義を知ること」ができるかどうかに変えている。

①bイエスのたとえは本来、天の国の教えを日常的な素材を用いて分かりやすく教えるものであるが、天の国の奥義に心を閉ざす者には「謎」となる。弟子は、「なぜ彼らにたとえ(謎)で話すのか」

と尋ねる（10節）。マルコでは、外の人々に神の国の秘密が解き明かされないのは、「見るには見るが、認めず、聞くには聞くが、理解できず、こうして、立ち帰って赦されることがない」というイザヤ（六9―10）の預言が成就するためである。しかしマタイでは、その答えは「あの人々が知らないから」である。「与えられていないから」「取り上げられるから」「見ず、聞かず、理解しないから」、イエスのたとえは「謎」となるとマタイは繰り返す（11―13節）。

◎イザヤ書においては、神は民の心を鈍くして、神を知ることができないようにすると言われる。それは、イスラエルに下された罰と言え。つまり、神は民との間に、ある隔たりを置かれたと言え。これに対して、イザヤは神のことは託されること（「預言」）によって、神と密接に結びつけられる。マタイ福音書においては群衆の心は鈍くなっているので、イエスの「たとえ」を悟ることができないが、弟子たちは「たとえ」によって、天の国の奥義を悟ることを許されており、ますますイエスに結ばれていく。

④このような両者の共通点を認めるならば、マタイ福音書における、舟に乗ったイエスと岸边に残された群衆という構図は、イザヤ書に見られる神と人間の隔たった関係を象徴的に示していると言え。イエスと群衆の間には越えられない隔たりがある。イエスはこの隔たりを間にはさんで、「たとえ」を投げかける。

◎「あなたがたの目は幸い、それらは見るから」（16節）

「あなたがた」は、見る目と聞く耳を持った弟子たちを指している。ただ単に「見る」のでも「聞く」のでもなく、神の恵みとしての「認識」（11節）によって見る人々、そして聞く人々のことである。この「あなたがたの」は文頭に置かれ、強調されている。なお、この節と次節はルカ10章23―24節に並行記事がある。「良い地の上に蒔かれた者」は、「言葉を聞く者であり、そして理解する者」である（23節）。それは、イザヤの預言に照らして見るなら、「心が鈍らず、耳が遠くならず、目を閉じない」者である。

#### ④豊かな実りを期待して蒔く

①パレスチナでは、あらゆる所に種を蒔いて、その後で土地を耕す。従って、無駄になる種も多く、収穫の率も良くはない。しかし、農夫は豊かな実りを信じて、無駄を承知で種を蒔き続ける。イエスも農夫と同様に、徒労に終わるように見える現実の中で、豊かな実りを信じて、宣教を続ける。宣教活動はすぐには目に見えるような華々しい成果をあげるとは限らない。しかし宣教者は、天の国、神の御言葉は必ず豊かな収穫をもたらすことを信じて、自らを励ます。イエスは自らの宣教の姿のうちにそれを示している。

②イエスは弟子にも群衆にも「たとえ」を話すが、弟子には天の国の奥義を明かす真理の言葉となるのに、群衆にとっては「たとえ」謎」となってしまう。この違いは、「天の国の秘密を悟ること」とへと開かれているかどうかにかかっている。しかし、「天の国の奥義を知ることが与えられている」と神的受動態が用いられていることに示されているように、開くのは人間自身というよりは、神である。私たちの望みに合わせて、神が働いてくれるなら、イエスのたとえに教えられ、「天の国の秘密」を悟ることができる。

◎天の国は人間世界を越えているから、その秘密は「たとえ」によってしか語ることができない。イエスは誰に対しても分け隔てなく、天の国の秘密を明かす「たとえ」を語っているが、神に心を閉じている者にはそれが「謎」に終わってしまう。しかし、神に開く心を持っているなら、ますます多くのことをイエスから学ぶことができる。たゆまず天の国を宣教するイエスの姿を見つめる教会は、イエスのように神の言葉を信頼し、身を任せて生きるようにと励ます。